

第4回日本宗教研究・南山セミナー

深堀彩香

FUKAHORI Ayaka

2019年1月12日・13日の二日間にわたり、南山宗教文化研究所において「第4回日本宗教研究・南山セミナー」が開催された。2013年から始まり今回で4回目を迎えた本セミナーは、海外の大学院で日本宗教を研究する日本語を母語としない若手研究者を招聘し、研究発表および日本人研究者とのディスカッションを日本語でおこなう機会を提供することをひとつの目的としている。昨年からは名古屋大学・人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）との共催となり、今回も日本学術振興会拠点形成事業（A.先端拠点形成型）「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」の一環としておこなわれた。発表者5名とディスカッサント5名のほか研究所内外からの参加者を含め、2日間で30名以上が集った。筆者は第3回開催を会場で拝聴したが、今回は2日目午前中の司会として携わった。前回、各発表者の研究レベルが非常に高かったことが強く印象に残っているが、今回もその時の記憶が蘇るようなセミナーであった。

今回選ばれた5名の研究者と発表タイトルは以下の通りであった。

Silke R.G. Hasper (Heidelberg University)
「若者はどこ？現代日本における社会参画仏教と仏教青年会について」

Franziska Steffen (MLU Halle-Wittenberg)
「明治時代における「宗教」を論じる武器：「邪教」か「日本唯一の神道」か。天理教文書の比較検討を通じて」

Emanuela Sala (SOAS University of London)

「神のアイデンティティの問題：山王神道における一例」

Jesse Drian (University of Southern California)

「聖地と本地垂迹：弁才天ネットワークをめぐって」

Xingyi Wang (Harvard University / 龍谷大学)

「叡尊における二つの身体：臨終の瞬間と往生」

各発表は45分の発表と45分のディスカッションの計90分で構成されており、このディスカッション時間の長さが本セミナーの特徴とも言える。発表タイトルからも分かるように、今回も多様な視点から研究発表がなされ、これらの発表に対して、阿部泰郎氏（名古屋大学）、岩田文昭氏（大阪教育大学）、小林奈央子氏（愛知学院大学）、



吉田一彦氏（名古屋市立大学）、近本謙介氏（名古屋大学）の5名が時間の許す限りコメントし、発表者と深い議論を交わした。

初日の最初に発表をおこなったハスパー氏は、現代日本における仏教の社会参加と若者、すなわち次世代の活動について取り上げた。現代の宗教が教義よりも実践を重視する傾向にある中で、次世代を担う若者の参画が現代日本仏教の大きな鍵となってくるという考えから、仏教青年会の現代日本社会における意味を探るべく、全日本仏教青年会と慶應義塾大学仏教青年会を例に考察した。各会の活動を分析した結果、両者ともほとんどの会員が寺院関係者であった一方で、前者は主に世界平和推進を目的としているのに対し、後者は交流、機関誌、座禅を活動の大きな柱としているという活動趣旨の相違が示された。氏は、さらに、世の中を宗教界と世俗界に二分する考え方は構造上の問題であり、実際には両世界が混在していることを明示した上で、時代による変化も見ていく必要があると論じた。この発表に対し、小林氏からは仏教青年会の現代と近代の歴史的側面を比べてみてはどうかとのコメントがなされた。また、愛知学院大学の林淳氏からは慶應義塾大学以

外の大学、すなわち、東京大学と早稲田大学の仏教青年会との関係やYMCAと仏教青年会との関係も見るべきであるというアドヴァイスがなされた。

次のシュテフェン氏は、新宗教とされる天理教の明治時代における形成過程を再検討するために、19世紀末の世界宗教史の枠に位置づけ、天理教とその信仰療法をめぐる議論に焦点をあてた。1890年代以降に出版された天理教批判者による出版物と天理教側との議論を比較した結果、両者は唯心論的な議論を展開し、天理教、神道、自然科学等と関連付けようとし、啓示宗教の概念を利用したことが明らかとなった。氏は、本発表が今後の新宗教の形成にも一石を投じることが可能となる一考察として、「宗教」や「迷信」概念の論弁的性質を証明できたと結論づけた。この発表に対し、ディスカッサントからは明晰な発表かつ面白いストーリーであると評価する声があった。その上で、岩田氏は戦後の資料の見方が問題になると指摘し、理論家と現場の見解、あるいは信者の理解はどのようであったかというコメントをされた。近本氏からは国や政治との関係や、海外でキリスト教等と対峙しながら布教する場合についての質問

がなされた。また林氏からは行政との関係をはっきりさせるべきであるというアドバイスとともに、教派神道への参入と論争勃発の因果関係についてのコメントがなされた。

2日目はサーラ氏の発表から始まった。氏は、神のアイデンティティの問題について山王神道を例に、特に日吉社の社家祝部氏によって編纂された『耀天記』所収「大宮御事」を中心に考察した。「大宮御事」では日吉社の一番重要な宮「大宮」に安置された神のアイデンティティと姿について多数の伝承が語られている。氏は、「大宮御事」における神のアイデンティティの問題について、その曖昧さが重要な点になるのではないかと指摘し、さらに山王神道は比叡山延暦寺のみならず、琵琶湖周辺の社家からも作られたため、他分野での神に関する思想はこうしたネットワークから成立されたのではないかと論じた。この発表に対し、阿部氏は神のアイデンティティという中核をなす問題に果敢に挑むことに敬意を表しつつ、『耀天記』は歌を通して神のアイデンティティが想起されるという点が重要ではないかとコメントされた。また吉田氏から

は山王の神は日本の神か中国の神かという問題についてのコメントの他、神のアイデンティティは時代とともに変化しているため、変化の中で位置づける必要があるというアドバイスもなされた。

次のドライアン氏は、本地垂迹説と地域性の関係を考察する試みとして、それぞれの聖地に座す弁才天を結びつける言説の中から、本地垂迹に対する同一説と、地域色を与える寺社縁起や伝承を取り上げ、分析した。その結果、弁才天に対する言及を含む寺社縁起、注釈、『溪嵐拾葉集』のような宗教言説を集録したものを比較すると、弁才天を区別する一方で、その言説が弁才天を統一する解釈も読み取れることが明らかとなった。氏は、弁才天の聖地を結びつけるネットワークは、距離の離れた聖地同士を結び付け、解釈の流動性や再解釈の可能性により、聖地と神の関係を示すことができたのではないかと論じた。この発表に対し、南山宗教文化研究所のスワンソン氏は配付資料に掲載されていた『溪嵐拾葉集』に記載されている図に関して、ご自身が博士論文を執筆した際に提示した図とその解釈についてコメントされた。また近本氏か



らは、成立年が近い『溪嵐拾葉集』(1318)と『相州津村江之島縁起』(1323)には類似したことが書かれており、情報を共有しているという点は極めて重要であるなど、学位論文執筆を見据えたコメントがなされた。

最後のワン氏は、叡尊が臨終を迎えるために行なった諸々の準備を考察する上で、彼の修行実践を取り扱い、唯識教学から複雑な影響を受けたのではないかという問題を究明した。叡尊は心身の修行を同時に進行すべきであると考えており、理論と実践との融合が彼の生涯を通して読み取れるとした上で、叡尊が記した基の『表無表色章』に対する注釈等を例に分析を試みた。氏は、叡尊が自誓受戒を用いて、戒律を保ち、基の著作を拝読した後、弥陀浄土ではなく、自ら兜率天に往生しようという願を立ったと考えられると結論付けた。この発表に対し、阿部氏からは臨終時の奇瑞が発心の表われであると論じた点や、往生と成仏の概念について質問が出た。近本氏からは叡尊像を涅槃像になぞらえたと言えるか否かという点や、叡尊の律の考え方についてコメントがなされた。また、南山宗教文化研究所のJ.W.ハイジック氏からは、叡尊の場合、発心がある意味で個人的なものだけではなく、歴史を超えたようなものとして誰でも行ずることができるかと捉えることもできるが、その点はどう考えるかという質問もなされた。

以上のように、5名の発表がそれぞれ独創的で多岐にわたるテーマであったが、各発表同士が繋がる部分もあり、今後の研究の新たな可能性が感じられた。発表者たちからは、本セミナーへの参加は大きなチャレンジだったのでとても緊張したが、雰囲気が高く、貴重なコメントやアドバイスを頂けて良い勉強になったという声が聞か

れた。他方、ディスカッサントからは神仏習合の研究は奥深く非常に難しいが、海外の若い研究者が果敢に取り組んでいることが本当に嬉しいという喜びの声や、今回の経験を是非とも活かしてほしいという発表者への激励の言葉が聞かれた。

どの分野の研究においても言えることであるが、セミナーを通して、こうした学際的・国際的な取り組みが研究の深化と発展にとって如何に重要であり、意義深いかを再認識することができた。また、ひとつの研究テーマに対してまとまった議論の時間が設けられ、あたたかな雰囲気の中で議論を深め、ディスカッサントからの指導的なアドバイスをや情報提供をはじめ、研究の核心に迫る問題への言及や今後の可能性への示唆などを受けることは、発表者にとって大変貴重な経験であるとともに実りある時間であったように思う。今回の5名の発表者の今後の研究の発展と一層の活躍を心から祈りたい。

ふかほり・あやか
南山宗教文化研究所研究員